

海外アカデミック・ディスカッション	
道化と仮面、その身体表現の可能性 —ジャック・ルコック国際演劇学校のワークショップを受けて—	
川上 暁子	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 9 月 4 日～2009 年 9 月 18 日
場所	フランス、パリ
施設	ジャック・ルコック国際演劇学校
研修交流 プログラム	夏季短期ワークショップ「Jeu et Masques (Play and Masks)」

これまで、ヨーロッパ中世における仮面喜劇コメディ・デラルテの身体表現を卒業論文で扱い、修士論文では道化の歴史的起源を辿り、道化的要素の考察・構造化を試みるなど、道化の身体表現について研究を行ってきた。コメディ・デラルテのキャラクターとして有名なアルレッキーノや、時代の中で変遷を遂げたピエロやクラウンなどに代表されるヨーロッパの道化に着目して、研究を進めている。

研修先であるジャック・ルコック国際演劇学校は、フランス・パリに拠点を置く 2 年制の演劇学校である。1956 年、劇作家・演出家であるジャック・ルコックによって創設された。研修先として選んだ理由は、舞台芸術分野での知名度と影響力、そしてルコック・システムと呼ばれる身体表現に関するその教育法に大変興味があったからである。また、この学校はコメディ・デラルテとクラウンの身体表現を重視して教育法の一環に置いており、ヨーロッパの演劇の伝統と道化の身体表現について学ぶことができると考えたからである。さらに、コメディ・デラルテと共通性を説かれることがある日本の仮面を用いる喜劇に、狂言がある。ヨーロッパ演劇の伝統に触れることで、日本の伝統的な演劇についても視座を深められると考えた。

今回の研修では、「Jeu et Masques (Play and Masks)」と題された 50 時間に及ぶ 2 週間の短期集中のワークショップを受講した。一日 4 クラスが実施されるハードワークだったが、学校の卒業生でもある経験豊富な 3 人の教師たちの教え方が魅力的なことから、ヨーロッパ各地や南米、アジアから集まった国際色豊かな参加者たちの助けもあり刺激的な時間を過ごすことができた。

ワークショップの内容は、Le masque neutre (中性マスク)、コメディ・デラルテの Les demi masques (半マスク)、クラウンの赤い鼻など、仮面を通してその方法論とテクニックを学び、仮面と必

要とされる身体性について実践しながら考察していく内容だった。仮面の種類はその他に les masques expressifs (表情マスク)、les masques larvaires (幼虫マスク)、les masques américains (アメリカンマスク)、Les masques utilitaires (道具マスク) などを用いた。

今回の 2 週間の研修を通して、身体から生まれる感覚や表現が重要だとするルコックの教育理念が色濃く反映された指導内容を経験することができた。ルコックは教育課程の 2 本柱として、即興劇と動きのテクニックを挙げている。即興劇を担う大きな要素がマスクワークであり、動きのテクニックとして身体の観察・分析を重視しオリジナルな動きを発見することが望まれた。またそれらを補う形で学生の自主稽古（個人・グループによる創作）が用意されていた。

そして、コメディ・デラルテや中性マスクなどの貴重な実物を見ることができた。実際にそれらの仮面やクラウンの赤い鼻を着用して、即興劇や動きのテクニックを実践できたことは自身の研究において大変貴重なことだった。着用すると、視界は遮られ、仮面による顔への圧迫感と身体の閉塞感がすぐくあることが分かった。思いの外、身体細部への集中が必要とされた。

実践を通して、仮面と着用した身体について観察し考察を行った。まず、仮面は身体における固定点となり、仮面という固定点が身体の動きを生み出す原動力になっていると考えられた。仮面によって顔の表情が制限されるが、むしろそのために、仮面を着用した身体が生み出す即興は、非常に表現性が豊かである。また、仮面のインパクトが視覚的に強いいため、着用した身体には、動きの明確さと存在としての重量感が必要とされた。今回の実践を経て、仮面を着用することが、身体による表現創造の可能性をつくり出していることが分かった。今後も、身体

表現における仮面の効果について考察を行い、仮面を表現の原動力として用いてきたと考えられる道化とのつながりについて、さらに研究を続けていきたい。

「これもマスクだ」とクラウンの赤い鼻について、ワークショップの最後に教師から話がなされた。様々なマスクワークを経験した延長線上にクラウンの赤い鼻があるということである。「〈身体がマスク化〉されなければクラウンにはなれない」とも言及された。今後、道化の身体表現と仮面との関わりを研究していく上で、その意味するところは深く、考察を続けるべきだろう。また、コメディ・デラルテなどの仮面を着けて実践する中で、日本の狂言と身体の使い方において類似性が感じられた。動きのテクニクとして骨盤の位置や使い方、重心の落とし方に共通性が見出せるのではないかと推察された。立場の逆転や荒唐無稽さなど、表現に共通性を見出せることはよく論じられるが、身体性においてはどうか、実践を踏まえて体感する貴重な機会となった。

今回の研修は、図版や映像による資料分析だけではなく、自身の身体を使って実践を試みて考察を行うという貴重な体験となった。博士論文として道化

の解釈を論述する内容の中で、身体表現に関する項目、特に道化の表現に仮面がもたらす効果について、今回の研修内容を踏まえた考察を行いたいと考えている。今後は、本務校である清和大学短期大学部の平成21年度紀要論文として、今回の研修内容の詳細について発表予定である。また、『舞踊學』次号に論文投稿を希望している。文献だけでは補うことができない非常に有効な情報や知識を得ることができ、さらに研究を発展させていくことができると考えている。

#### 参考文献

- ジャック・ルコック 大橋寸也 訳『詩を生む身体—ある演劇創造教育—』而立書房,2003
- Lecoq, Jacques. "Le Corps Poétique—Un enseignement de la création théâtrale" Actes Sud, 1997
- Lust, Annette. "From the Greek Mimes to Marcel Marceau and Beyond: Mimes, Actors, Pierrots and Clowns: A Chronicle of the Many Visages of Mime in the Theatre" Scarecrow Press, Inc., 2000

かわかみ あきこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻  
表象芸術論領域 3年

#### 【指導教員のコメント】

川上暁子さんは、ヨーロッパ中世における仮面喜劇コメディ・デラルテの身体表現に着目した「コメディ・デラルテにおける身体表現」（卒業論文）、道化の歴史的起源を辿り、道化的要素の考察・構造化を試みた「舞台芸術における道化的要素—カンパニー「水と油」を通して—」（修士論文）など、道化における身体表現について一貫して研究を行ってきた。博士論文では、コメディ・デラルテのキャラクターとして有名なアルレッキーノや、時代の中で変遷を遂げたピエロやクラウンなどに代表されるヨーロッパの道化に着目して、道化的な身体表現に関して研究を進めている。それと同時に、道化の身体観を映し出すトレーニング方法およびテクニクについて明らかにする必要があると考えている。そこで、このたびの海外アカデミック・ディスカッションによって、ジャック・ルコック国際演劇学校で「Play and Masks」と題された短期集中の授業を受講した。授業内容は、ニュートラルマスク、コメディ・デラルテのマスク、クラウンの赤鼻など、Mask（仮面）を通して方法論と身体テクニクを学ぶものであった。この実習を通して、ヨーロッパが育んだ道化の身体性やその訓練方法に触れる機会となり、文献だけでは補えない非常に有効な情報・知識が得られたのではないかと考える。

これまでの研究において、彼女は仮面に着目した研究を進めていなかったもので、「Play and Masks」の短期集中授業において、道化における身体と仮面の結びつき、ひいては仮面によって変容する身体性がどのように道化的表現と関係しているのかを探究する大きな手がかりを得たのではないだろうか。今後の研究の進展を期待して見守りたいと思う。

（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 猪崎 弥生）